à l'occasion du 5ème anniversaire

三善 晃「マリンバの世界」

2019年2月6日（水） 19:00 杉並公会堂

組曲『会話』マリンバ独奏
SUITE"CONVERSATION" for Marimba (1962)

『トルスIII』マリンバ独奏
TORSE lll for Marimba (1968)

『トルスV』３台のマリンバ
TORSE V for 3 Marimbas (1973)
YOKO SHINOZAKI, JUNKO HARA, AYA SUZUKI

- Intermission -

『六つの練習前奏曲』２本マレットのための
SIX PRELUDE ETUDES, for Marimba with 2 Mallets (2001)

『二台のマリンバのための協奏的練習曲』
ETUDE CONCERTANTE, for Two Marimbas (1977 rev.1979)
YOKO SHINOZAKI, AYA SUZUKI

『リップル』独奏マリンバのための
RIPPLE for solo marimba (1999)

加藤訓子

KUNIKO KATO

音楽誌の権威英グラモフォンは、「巨匠への通過儀礼もクニコには、勝利の儀式に過ぎない。」と讃し、
英サンデータイムズ紙は、「力強く、繊細、根源的でエレガント、見事である。」と評する。
桐朋学園大学音楽学部打楽器科卒業。同大学研究科修了。ロッテルダム音楽院をsumma cum laude を授与され首席で卒業した最初のパーカッショニスト。ダルムシュタット国際現代音楽祭クラニヒシュタイン賞、第十二回サントリー佐治敬三賞、第十回CDショップ大賞2018、平成30年度（第73回）文化庁芸術祭優秀賞等、受賞歴多数。英国スコットランドの高音質で知られる世界的レーベルＬＩＮＮからＣＤを出す唯一の日本人アーティスト。パール楽器・アダムス社（蘭）グローバルエンドーサー。米国在住。

http://www.kuniko-kato.net
http://www.linnrecords.com

篠崎陽子

YOKO SHINOZAKI

桐朋学園大学音楽学部打楽器科卒業。
マリンバを安倍圭子、林道代、木村陽子打楽器を佐野恭一各氏に師事。
第17回日本クラシック音楽コンクール全国大会入賞。第12回"長江杯"国際音楽コンクール第２位入賞（１位なし）。第14回JILA音楽コンクールマリンバ部門第１位。第44回TIAAクラシック音楽コンサート出演、および特別賞受賞。ソロリサイタルを各地で開催。コンサート活動を中心に、テレビ番組のレコーディングや「飛鳥ll」にて演奏するなど幅広く活動中。
2014年ソロアルバム「Nozomi＝明日への希望」をリリース。

http://www.upf-marimba.com

原　順子

JUNKO HARA

桐朋学園大学音楽学部打楽器科卒業。同大学研究科修了。
マリンバを安倍圭子、田代佳代子、香椎愛子、打楽器を佐野恭一、塚田吉幸の各氏に師事。
桐朋学園大学研究科在学中東京文化会館安倍圭子レクチャーコンサート「祝典と音楽」シリーズ 第三回「日本発信の輝かしきマリンバ音楽の歴史」にてソリストとして出演。文化庁「子供の育成事業」にて東京フィルハーモニー交響楽団の巡回公演に出演。地元佐賀県でマリンバリサイタルを開催。2017年パーカッションアンサンブルグループ・ハッチポッチクインテットよりCD'Hotchpotch's Favorites!'をリリース。

鈴木　彩

AYA SUZUKI

桐朋学園大学音楽学部打楽器科卒業。同大学研究科修了。
マリンバを安倍圭子、加藤訓子、打楽器を佐野恭一、塚田吉幸の各氏に師事。
2012年日本打楽器協会主催「マリンバスピリチュアルコンクール」第一位、三木稔賞受賞。日本打楽器協会主催新人演奏会新人賞受賞。
2014年ポーランド国際打楽器コンクールマリンバ部門シニアの部 第1位、併せてグランプリ受賞。ベルギー・ゲント音楽院に留学中。
クラシカルな枠にとらわれず、ダンサーやライヴペインティングとコラボレーションするなど、パフォーミングアーツの分野でも精力的に活動している。

http://www.aya-suzuki.com

主催：kuniko kato arts project　協力：NPO芸術文化ワークス・カノン工房　協賛：（株）全音楽譜出版社
助成：芸術文化振興基金　後援：日本現代音楽協会

この演奏会は inc.extention＝kuniko kato arts project アーティストインキュベーション inc.エクステンション事業です。

LINN　Pearl　ADAMS　YAMAHA MUSIC JAPAN CO., LTD.

「三善晃マリンバの世界」　第一部

今日この日を無事に迎えることができ、ここにご来場いただきました皆様へ心より御礼申し上げます。
2013年に旅立たれた我が国を代表する作曲家三善晃氏を偲び、５年の歳月と、残された素晴らしい作品を、私たちの手により、少しでも多くの人々に伝えることができたらという思いで今日の演奏会を企画しました。
幸運なことに、私が学んだ桐朋学園大学では、全盛期であった三善晃が長く学長を務めておられました。賢明で思慮深く、音楽には妥協のない非情な厳しさもありながらも、常に穏やかで人に対して本当に優しい三善先生、まっすぐな嘘のない面持ちでいつも学長室に静かに座っておられたのを思い出します。
氏の人となりと音を通じ、そのレガシーを少しでも次世代にも伝えられればという思いも込めております。
今回選抜された若手マリンバ奏者たち、彼らは三善晃という人物を知りません。残された手書きの楽譜を辿り、想像を膨らませ、どんな風に解釈し、演奏を繰り広げてくれるでしょうか。また彼ら自身が本当の意味で、三善作品の神髄に触れる事ができるのは、この舞台。それぞれに身を持って体験することとなるでしょう。

私たち演奏家にとって、作曲家の残してくれる作品というのは宝物である。
それを見つけた時の喜び、それを手にし、楽器と向かい、時間をかけて磨いて行く。
一つ一つの音を磨いて行くと歪な形をしていた原石が光り出す。
空中の上でキラキラと輝き、人の心へと届いてゆく。
この身体を通してその役目を果たすのが我々演奏家の仕事である。

以下曲目解説については、氏の作品と人となりを、デフォルメすることなくお伝えしたく、「六つの前奏練習曲」（と追記）以外、すべて三善先生の直筆による言葉をそのまま引用させていただきました。（トルスlllに関しては、当時三善先生が東京文化会館館長でおられた時に、2007年私が小ホールでのレクチャーコンサートでトルスlll 全曲を初めて弾く際にいただいたファックスメッセージの一部も追記しています。）
三善先生が語りかけるように、この演奏会を通して三善晃の音楽と人物像が少しでも皆様に伝わる事を願いつつ、ご紹介してゆきたいと思います。

組曲『会話』 マリンバ独奏

SUITE"CONVERSATION" for Marimba (1962)　　初演：20 November 1962 Tokyo by Keiko Abe　委嘱：Keiko Abe

田村さんからマリンバの楽しさを教えられていたので、書くのがとても楽しかった。
子供のいる家庭の、いろいろな会話。今日一日何も事件は起こらなかった。みんなご機嫌よくて、いたわりの気持に満ちた優しい会話（一）。いいことがあった。もう何度も「よかったね」をくり返した。それでもまた、「あれ、ほんとによかったね」（二）。坊やが外から走り込んで来る、くやしいことがあった。それをいうのに、それでね、それでね、と早口でくり返すのだが、聞いてるほうにはよくわからない。坊やのくやしさはつのるばかり（三）。いいことを話そうと思って語りかけるのだが対手（あいて）は生返事ばかり。話すほうが焦れても怒っても叫んでも、うーむ、と同じこと（四）。会話はにぎやか。だが、てんでんにものをいうのでどうもくいちがう。それでもいいんだ。何かかんか、いってることが楽しいのだから（五）。（一九六二）

「遠方より無へ」著者 三善 晃（発行所 株式会社 白水社より）

『トルスIII』 マリンバ独奏

TORSE lll for Marimba (1968)　　初演：4 October 1968 Tokyo by Keiko Abe　委嘱：Keiko Abe

音の響きを、さぐるのは、どの作曲についてもいえることですが、ときには特にある発音体についてその興味が先立つので、そのようなとき、私はトルスとその曲を呼ぶことにしています。今度はそれが独奏マリンバです。
安倍さんは、私には最も創造的なインスペクターです。私に未知の像を、安倍さんの音楽のなかに投企する、それがこの作曲でした。
Thèse は二つのテーマの提示と発展。
Chant　は、その旋律的和声的確保。
Commentaire は、その音列的解体。
Synthèse は、その発展と復帰。（一九六八年）

「遠方より無へ」著者 三善 晃（発行所 株式会社 白水社より）

三善　晃　７月２１日

（冒頭文省略）

「トルス」Torse)は彫刻の世界ではトルソーと呼ばれていて、頭部、四肢のない上半身だけの胸像のことです。頭も両腕もない上半身像ですが、その見えない頭がどちらを向いてどんな表情をしているのか、想像が付くような気がします。両腕も、どんな形でどこを向いているのか、見えるようです。
私は、この「トルス」と名付ける連作で、音響の実験をし、その結論は実験そのものに委ねようとしました。つまり、はっきりした目標を表に出さずに、音響実験の試みそのものにその成果を自ら確かめようとしたのです。そういうわけで、「トルス」の連鎖は５つあり、

[l](弦楽合奏1959)、
[ll](混声合唱、エレクトーン、ピアノ1961)、
[lll](マリンバ 1988)、
[lV](尺八、２箏、十七弦、弦楽四重奏 1972)、
[V](３マリンバ 1973)、

ですから、これらの作品はどれも音響上の実験を試みており[lll]も例外ではありません。当時マリンバは発展途上の楽器で、安倍圭子さんがその開拓者でした。マレットの箏、トレモロ、グリッサンド、強弱の可能性…すべてわからないことが多かったのです、すべては、やってみよう！という実験でした。
l . Thèseはテーゼ（テーマ）です。続いて、ll . Chant (唄)、lll . Comentaireは「解説」つまりテーゼの説明で、当時、P. ブーレーズの「主なき小槌」あたりの考え方です。lV. のSynthèseはテーマの「総合」ということで、l から lVまでを通常の言い方にすると、提示－間奏－発展－復帰 という概念で捉えてよいかと思います。

（結び文省略）　　草々敬具　三善　晃

追伸：l Thèse の最後から２小節目、最後のSop.はCナチュレです。

『トルスV』 ３台のマリンバ

TORSE V for 3 Marimbas (1973)　　初演：15June 1973 Tokyo by Atsushi Sugawara, Mariko Okada and Mutsuko Yaneya　委嘱：Group 3 Marimba

グループ・「三マリンバ」のために書いた。普通のマリンバに、バス、グランドを加え、ビブラホンや各種打楽器を配したアンサンブル。
異なる時相が接近し交錯するところまで、すなわち、全体が前拍節（アナクルーズ）の形質をもつ。
一般にアナクルーズは、吸った息をとめて弾き切らねばならないから、この曲では弾き終えるまで耐えた呼気によって、構造の頂点 ー すなわち、ドラマの解体をむかえる。（一九七九）

「遠方より無へ」著者 三善 晃（発行所 株式会社 白水社より）

第二部

『六つの練習前奏曲』 ２本マレットのための

SIX PRELUDE ETUDES, for Marimba with 2 Mallets (2001)
1.Scale, 2.Harmony, 3.Contrapuntal form, 4.Chromatic scale. 5.Double chords, 6.Beat of the same sound [octave])
初演：24 October 2001 Tokyo by Takayoshi Yoshioka　委嘱：Takayoshi Yoshioka

桐朋学園打楽器科の先輩にあたる吉岡孝悦さんのために書かれた最後のマリンバ作品。この曲が在ると聞いた時、こんなものがあったのだ！と驚いた。勿論未出版である。マリンバを学びだして間もないころ、「初めての現代曲」として与えられるのが三善晃の『組曲会話』。誰もが『会話』の「やさしいお話」が初めての現代音楽となることが多いだろう。子供には意外にも音楽的に難しい「会話」はなかなか組曲全曲をやりきるのは大変ではなかろうか。
必然的に現代のレパートリーが多くなるマリンバのためのユニークな練習組曲。三善先生がマリンバのために残してくれていた。
現代音楽に必須の増三和音、増六度や減七７度の跳躍から解決。４度、５度の連続、オクターブやクロマティック、アルタードスケールやディミニッシュ、考えてみればどれもクラッシック音楽をはじめとしてどんなジャンルにも出てくる音列パターンである。つまりは「楽器を弾く、上手くなる」には必須な練習ばかり。子供でも楽しく、飽きずに練習を一人で続けられるよう、遊び心満載（?）そんな配慮と三善先生の優しさがうかがわれる。冒頭のテーマや課題に沿って選ばれた音が最後まで貫かれる。最初はとっつきにくいかな?と思いきや、一つずつ謎解きしながら練習に励んでみた。そうしたら何なく覚えてしまった。あとは練習あるのみ！だがやっぱりいくらやってもキリがない。
子供の頃、ピアノに向かい、私の小さな手でカバレフスキーのこどものためのピアノ小曲集やブルグミュラーの「アラベスク」などを練習している自分を思い出した。　（加藤訓子　記）

『二台のマリンバのための協奏的練習曲』

ETUDE CONCERTANTE, for Two Marimbas (1977 rev.1979)
初演：18 July 1977 Tokyo, Nagoya by Mutsuko Fujii and Tomoko Kusakari　Rev.1979 23 June 1979 Tokyo by Keiko Abe, Takayoshi Yoshioka　委嘱：Contemporary Marimba Recital '77

安倍圭子さんを通して藤井むつ子さんと菊池とも子さんから依頼があり、二台のマリンバの協奏的な音像を抱懐することになった。
演奏日までにもう半月しかない今日、私の五線紙にはその断片のいくつかが、いたずらに散在しているだけで、とうてい、言葉でそれを語ることは、いまできそうにもない。
ただ、今までマリンバのために書いてきた、たくさんの音を遠景に押しやって、私のエクリチュールの骨をここで手にしてみたい、と思いつづけている。
それをお二人のマレットが打ち砕くことで、マリンバの語彙が拡がれば、と希っている。（一九七七）
（この曲は現在、未完である。今年いくつかのエチュードの、相位を対置させる心算でいる。一九七九）

「遠方より無へ」著者 三善 晃（発行所 株式会社 白水社より）

『リップル』 独奏マリンバのための

RIPPLE for solo marimba (1999)
Obligatory piece of the 2d international Concours of Marimba in OKAYA 1999
初演：27 August 1999 Okaya　委嘱：International Marimba Festival

1999年、安倍圭子さんの先導で世界から著名なマリンビストたちが岡谷市に集まり、「第２回マリンバ世界コンクール」が開かれた。この曲はその２次予選のために書かれた。
地上の可憐なさざ波も、地球深奥のマグマと関わりがある。むしろマグマの多様な表現の一つとして、そのさり気ないエネルギーの所作に憧憬の目を見張っていたい。…たまたま岡谷市が、その思いに相応しい街だった。
聞けばもともとマリンバのマの字も知らないという街が、最終的には、全市をあげてこのコンクールを応援した。そこに愛と献身があった。地域社会の懐の深さを味わうことができた。

全音楽譜出版社刊「三善晃：リップル」より転載許諾済み

追記：アンコール「荒城の月」童声合唱とピアノまたはア・カペラ（未出版　近代音楽館所蔵）
KOJO NO TSUKI OF RENTARO TAKI (1879-1903) text by Bunsai Doi
For Chirdren's Chorus and Piano or"a cappella"(1977)
初演：March 1977 Hong Kong Tokyo Broadcasting Children's Chorus Group cond. By Fujio Furuhashi
Version for "a cappella") 8 May 1978 Tokyo

三善晃は、多くの「唄」や合唱の作品を書いており、日本歌曲や日本民謡の編曲もたくさん残している。晩年のころは日本の各地に纏わる民話や言葉、そして日本の楽器（和太鼓など）を用いて新たな手法（といってよいかは作曲家でない私が言うべきものかどうかは分かりかねるが）で創作されていた。
私が携わった「中新田縄文太鼓」の世界初演（1993）と松本古城太鼓のための＜四季＞（和太鼓合奏）などもそのうちである。
この演奏会を記念して、何か一つでもよいので、我々打楽器界であまり知られない三善晃の側面（編曲）にチャレンジしてみたかった。マリンバへ写して成り立つもの、そうして探し当てたものの一つがこの「荒城の月」である。

今日の実現に至るまで、様々な側面にてご協力いただいた、全音出版社の高木様、近代音楽館の森本様、白水社の小池様、そして陰で陰ながらいつも支えて下さり、にこやかにそして朗らかに、まるで三善先生の面影のままにいらっしゃるような三善由紀子夫人に心より御礼を申し上げます。

最後に、いつもながら無謀な計画の私に着いてきてくれた、「今日この舞台の同志たち」（一回り、二回り近くも若い！）彼らの真正面な取り組みをここに讃えたいと思う。

加藤訓子　2019年2月６日